

「供養」を科学する

—AIは「グリーフケア」に活かせるか—



近年、AI（人工知能）がめざましい進化をとげています。そんな中、仏事や亡くなった人を想うために、AIを活用しようとしている僧侶がいるという話を聞き、僧侶でもある凜咲編集部員が、お話を聞いてきました。

「グリーフケア」にAIを活用する

「私は、『グリーフ（近しい人が亡くなったときなどに生じる悲しみにより、心や身体におこる変化）』について勉強しているのですが、AIがグリーフのケアに活かせると思ったのです」東京・雑司が谷にある「大慈山佛心寺」の東京布教所で、そう語ったのは、ご住職の新田崇信師。

「最近、おとき（葬儀や法事のあとに行われる食事会）が減っていますよね。そうになると、亡くなった人との思い出について、お話する場がな

くなってしまおうと思ったのです」たしかにコロナ禍以降、葬儀などの仏事が縮小の流れとなり、「おとき」の席は減っています。集まるのが、家族や近しい親族だけになってきたため、「おもてなし」の意味での食事会が省略されるようになってきたのです。

「今までは、故人のことを知っている者同士で語り合うことで、自然と行われていた『グリーフケア』の機会が減ってしまいました。そうになると、故人の死を受け入れるまでに、だいぶ時間がかかってしまうことがあるのです」

「そのため、法要のあとと三十分くらい、故人について『話す場』『聞く場』をつくり、思い出やエピソードについて語ってもらう時間としてもらうという取り組みを始めました。それが『エピソードlink』です」

「参加者に、思い思いに故人について語ってもらい、それをAIで分析することで、思い出の中の『亡き人』からのメッセージ』を生成するのです。故人と向き合う、新しい形です」

を見つけたしてくれます」

「例えば、大勢でお話した場合、参加者それぞれの記憶やエピソードから、共通する視点を紡ぐことができますし、ひとりの場合、幼少期や学生時代、大人になってからなど、時代ごとの思い出から「共通する視点」を見つけられます」「これは、本来の仏教がもつ『私とあの人は同じである』という視点と重なると思っています。家族や親族、そしてお坊さんと共に、故人について考えることで、少しでもグリーフの解決につながるいいな、と思っています」このようにして紡いだ、亡き人か

故人を「再現」するのではなく、「思い出の中」の故人をつくる

近年、AIによって、亡き人を「再現」という取り組みもありました。故人の写真や、書いた手紙などから、AIが故人を生成し、実際に本人が喋っているようにみせる技術です。

しかし「本人がよみがえったみたい」という喜びの声の反面、「亡くなった人に対する冒とくではないか」という声もありました。このような意見は出なかったのでしょうか。

『エピソードlink』は、『亡き人の再現』というよりは、残された家族や友人のお話から『思い出の中』にある亡き人を呼び起こす」というイメージに近いものです。ひとりひとりの



らの「贈りものの帳」や、「エピソードlink」のようなお話の場づくりを、他の寺院や葬儀社へ広めていきたい、と語った新田師。「AIが共通点を見つけてくれることで、亡き人と自分の関係が固定化されず、時間とともに「アップデート」されていくのです」

「この活動を通じて、亡き人のメッセージを「贈りもの」として受け取ることができるように、そしてそれが「家族の絆」を深めるための一助となることを願っています」

そう語った新田師。今後のAIの進化が楽しみです。

3日

お大きなおにぎりを握っていた日々を覚えてる？
あの時も今も、
私の愛はその形のまま。
あなたの中で大きく育っているといいな。



「おにぎりは愛の形」

日めくりメッセージを製本したものです。様々な言葉がよみがえります。



ホームページトップ。徐々に申し込みも増えています。

ご利用者の声

「毎朝、父からのメッセージを読むのが楽しみになりました」
東京都在住 40代女性

亡き父からの言葉が、日々の励みとなっています。朝のひとときにカレンダーをめくり、父と語り合っているような温かな気持ちを感じられます。親しい家族の存在を思い出すことで、心が落ち着き、新たな一日を前向きに過ごせるようになりました。

「離れて暮らす兄弟とも母の思い出を共有できて、心が温まりました」
東京都在住 50代男性

母を偲びながら、兄弟たちと一緒に思い出を語ることができ、心がほっとしました。離れて暮らすため会う機会は少ないのですが、このカレンダーを通して母を共に感じられる喜びは、何ものにも代えがたいです。



笑顔の新田崇信師。
亡き人からの「贈り物帳」を、現代版の「過去帳」として使ってもらえれば、と語りました。